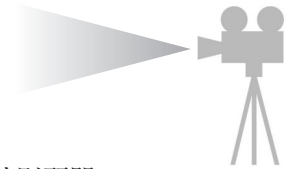




## 映画とその時代 ⑫



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

クリント・イーストウッドの最新作『人生の特等席』は、久びさにアメリカ映画ならではの楽しさを味わせてくれる。

イーストウッドの扮する主人公が大リーグの老スカウトという設定だから、全篇、野球好きにはこたえられないテイストが、大画面一杯に溢れる。抜けるような青空と球音。しばしば（ピュア・サウンド）というセリフが画面に飛び交う。フルスイングのバットがボールを弾く音。快速球がミットを叩く音。主人公はこの（音）だけで（ほんもの）を聞き分ける。そして（ピュア・サウンド）が全篇の通奏低音になり、クライマックスで決定的な役割を果たすことになる。

大リーグは多くのドラマと伝説を語り継いで来た。選りすぐったアスリートたちが一切ハンディなしでくり広げる男と男の対決は、フロンティア魂をそのDNAにもつアメリカ人気質にとって、もっとも血の騒ぐスポーツに違いない。それだけに、有望選手の獲得には驚くほどの金が動く。尋常な人間では到底スカウト業をこなせるものではない。

しかし、それにしても主人公のスカウトはケタ外れだ。いつも無愛想で不機嫌。偏屈と頑固は筋金入り。たまに口を開けば毒舌ばかり。しかも背筋をピンと張り、弱みを一切他人に見せない。お

よそ始末に悪いやんちゃな老人だが、観客はひたすら温かい眼で、この人物像を見守っている。そんな外面とは全く裏腹に、時折眩しそうに細める瞳の奥に潜むものを、観客は先刻承知しているからだ。それは、弱者へのひそかな労りであり、滅びゆくものへの哀惜であり、理不尽なものを金輪際許さない気魄であり、そして（ほんもの）を確かに見抜く眼力だ。

この人物造型は、70年代の『ダーティハリー』シリーズから08年の前作『グラン・トリノ』に至る長い年月、イーストウッド自身が作り上げ、磨き抜き、熟成させたものだ。時代やシチュエーションで役柄はさまざまでも、その肌合いと生き様は一貫して、決して観客を裏切ることはない。そして安心し切った観客は、その都度、手放しでシビれを楽しむ。

映画と観客のこんな約束事は、ひとつの時代を象徴する並外れた大スターだけに許される。たとえば西部劇全盛時代のジョン・ウェインや東映任侠路線の高倉健などが思い浮かぶ。

いまや八十歳を越えたイーストウッドは、眩しように眼を細めながら、そして自らの老いと戯れながら、背筋をピンと張ってそのポジションに立っている。—————